

茨城県山方町

江下山古墳

墳丘確認実測調査報告書

平成 9 年 3 月

茨城県那珂郡山方町教育委員会

茨城県山方町

江下山古墳

墳丘確認実測調査報告書

平成9年3月

茨城県那珂郡山方町教育委員会

題字　根　本　嘉　朗　　(山方町長)

序 文



この古墳は、平成5年10月28日茨城県水戸教育事務所生涯学習課文化財担当社会教育主事藤枝登先生と同事務所埋蔵文化財指導員千種重樹先生が本町の文化財を巡視中、新たに開設された主要地方道常陸太田烏山線の当該地域を自動車で通りがかった際に、道路方面に水平に石が敷かれていることに気付かれ、発見されました。

町教育委員会では、早速両先生や県教育庁文化課の指導を仰ぎながら、発見された古墳の場所の小字名を取り入れ「江下山古墳」と命名しました。

発見当時は、樹木や藪に覆われて外見からは判断が難しかった古墳でしたが、その後の確認が進むにつれて、墳丘に葺石があることや、前方部がほとんど開いていない茶臼山タイプ（手鏡形）の古墳の可能性があるとの報告を受けて、町教育委員会では、昭和39年より町長を会長に設立され、町の文化財の研究、調査、保存や町誌編さん等を行っている町文化財保存研究会にその旨を報告し協力を得て、水戸教育事務所と調査の方法や保存について協議の結果、墳丘全体の実測図を作成し、葺石が葺かれた築造当時の姿を再現することが決まり、平成6年度の予算に調査費を計上し、文化庁長官に確認調査について県教育長を通して進達をして、調査の実施に当たっては、町文化財保存研究会に委託をいたしました。

委託を受けた研究会では、貴重な埋蔵文化財を記録保存するため、水戸教育事務所文化財指導員千種重樹先生に調査団長をお願いし、研究会会員を主体とした調査団を編成し、平成7年2月14日より現地調査を開始して、同年3月16日この調査を終了しております。

現地調査結果といたしましては、予想通り手鏡形葺石古墳であり茨城県内では、初めての発見で、しかも茨城県考古学協会は、久慈川流域における前方後円墳の最北限は、大宮町小祝に所在する糠塚古墳であるとの認識であったが、この度の調査によって古墳時代の茨城県史料が書き換えられるほど非常に貴重な古墳であることが判明し、予想以上の成果であったと存じます。

調査報告を受けた町教育委員会では、早速この貴重な遺跡を永久に保存するため、町文化財審議会に諮問をいたしまして、平成7年3月27日町教育委員会の議決を得て、町有形文化財に指定いたしました。今後は、この貴重な遺跡を次の世代に伝えるため、その保護と管理に万全を期して参りたく考えております。

この調査にあたられました千種重樹先生を始め町文化財保存研究会の皆様のご苦労と関係者のご協力に対し、心より感謝とお礼を申し上げます。

山方町教育長 吉澤 利

例　　言

- 1 本書は、茨城県那珂郡山方町山方3420番地に所在する江下山古墳の墳丘および葺石確認実測調査報告書である。
- 2 確認調査は平成5年10月28日の新発見に伴うものである。
- 3 確認調査は山方町教育委員会の委嘱により、千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を主任調査員とし、水谷 正、飯島栄子の協力を受けて実施した。
- 4 確認調査は平成7年2月14日から同年3月16日まで行った。
- 5 墳丘の実測図は、60分の1の縮尺とし、センター20cmで、千種重樹、水谷 正、飯島栄子、木村登美子、菊池さち子の5名で行った。
- 6 葺石の実測図は、10分の1の縮尺とし、1mのメッシュを組んで、千種重樹、水谷正、飯島栄子、木村登美子、菊池さち子が分担して作図を行った。
- 7 実測図の整理・トレースおよび原稿の執筆は千種重樹が担当した。
- 8 本書に収録した写真は、千種重樹が撮影したものである。
- 9 確認調査に従事した山方町文化財保存研究会の各位および地元有志の方々の氏名は巻末に銘記した。

江下山古墳

目 次

序 文	山方町教育委員会教育長 吉澤 利
例 言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第一 章 プロローグ	1
第二 章 古墳の位置と自然環境	2
第三 章 歴史的環境	4
第四 章 調査の経過	6
第五 章 前方後円墳の変遷	13
第六 章 舟石考察	16
第七 章 エピローグ	17
確認作業従事者・謝辞	20

挿図目次

第一 図	古墳位置図・周辺地形図	3
第二 図	山方江下山古墳墳丘実測図	9～10
第三 図	山方江下山古墳舟石実測図	11～12

図版目次

- 図版第一 調査前の現状〈南より〉
調査前の現状〈北より〉
- 図版第二 古墳の遠景〈北より〉
後円部西側斜面の葺石確認作業風景〈南西より〉
- 図版第三 後円部北側埴丘下の礫群確認作業風景〈北より〉
前方部の葺石状況〈南より〉
- 図版第四 後円部西側斜面の葺石状況〈南西より〉
後円部東側斜面の葺石状況〈南東より〉
- 図版第五 後円部北側埴丘下の礫群（一）〈東より〉
後円部北側埴丘下の礫群（二）〈南より〉
- 図版第六 後円部北側埴丘下の礫群（三）〈西より〉
北方より後円部を望む〈北より〉
- 図版第七 墓丘測量風景〈南より〉
- 図版第八 現地学習会（山方小学校）〈南より〉
現地学習会（長田小学校）〈南より〉
確認調査にかかわった人たち

第一章 プロローグ

平成5年10月28日、茨城県水戸教育事務所生涯学習課文化財担当社会教育主事藤枝登と同茨城県埋蔵文化財指導員千種重樹の両名は、山方町教育委員会社会教育課立原正雄係長の案内で、町内の埋蔵文化財現況確認のための巡視を行っていた。

山方町大字山方字南皆沢5776番地ほかに所在する南皆沢古墳群の基数確認を行うのが、その目的活動の一つであったが、古墳群に向う車中から杉林に覆われた古墳らしいマウンドを発見した。

南皆沢古墳群の基数確認を終えての帰路、これを踏査した結果、墳丘斜面部に葺石を伴う前方後円墳であることが判明した。

この古墳は、町役場の西方わずかに350mほどの位置にありながら、しかも道路際に立地しているにも関わらず、地元の人たちは古墳という認識は持っておらず、古墳発見の報にも半信半疑だったようである。

前方部先端には目通り幹周4mのケヤキが聳り立ち、古老の話によるとかつては神輿の休憩所であったという。また、後円部北側一面には杉が密植されており、その裁植に従事した人もここが古墳であることには全く気付かなかつたといっている。

本古墳の発見は、直感と偶然としか言いようはないが、平成6年10月4日、略式測量を行い、地名（小字）の江下山を冠して「江下山古墳」と命名し、文化庁長官宛の「新発見届」を提出した。

略式測量によって確認された墳形の平面形は、前方部先端がほとんど開かず、断面形は後円部と前方部の段の高さが一連のいわゆる茶臼山タイプに近似する形態を呈する。

この墳形は、「手鏡型古墳」とも呼ばれ、茨城県内では最初の発見例となった。

町当局も次第に保存対策の関心が高まり、種々協議を重ねた結果、葺石の状態と墳丘を確認しつけて精密測量を行ったのち、現状に復して保存することになった。

山方町教育委員会が調査主体者となり、主任調査員に千種重樹を委嘱し、作業は山方町文化財保存研究会（会長根本嘉朗町長）の会員及び地元有志の協力を受けることになった。

平成7年2月7日、山方町中央公民館において調査会が組織され、規約・確認調査計画・予算などの審議を行い、平成7年2月14日より調査を開始した。

第二章 古墳の位置と自然環境

「江下山古墳」は茨城県那珂郡山方町山方3420番地に位置し、町役場の西方約350m、標高約70mの台地先端部に所在する。

古墳の北側を県道常陸太田一烏山線が東西に走る。

山方町は県の北西部に位置し、東は久慈郡水府村・同金砂郷町、西は美和村、南は大宮町、北は久慈郡大子町に接する。

昭和22年、山方村が単独で町制を施行し、昭和30年に諸富野村・下小川村・世喜村・塩田村の一部を編入した。

久慈川の上流域に位置し、東西16km、南北14kmを占め、東に八溝山地の男体山脈、西に鷺ノ子山塊が走り、山林が総面積の約75%を占める山間地域である。

『常陸國風土記』久慈郡の条に現在の県指定天然記念物「鏡岩」(山方町照山)についての記述があり、「郡より西北六里に河内里あり。本、古古之邑と名づく。(俗説に、猿の聲を謂ひて、ここが為す) 東の山に石鏡あり。昔、魑魅有り、萃り集ひて鏡を斬び見て、則ち自ら去りき。(俗に疾鬼も鏡に面へば自滅ゆと曰へり) 有らゆる土の色は青緋の如く、畫に用ふるに麗し。(俗にあをにと云ひ、或はかきつにと云ふ) 時に朝の命の隨に、取りて進納る。謂はゆる久慈河の瀧觸なり」と記されている。

古古之邑つまり河内郡は、当時陸奥国白河郡と接していたから、常陸の国内においては久慈川の瀧觸(源)であった。

山方町周辺の八溝山地は、栃木県今市市周辺とともに関東地方における頁岩・粘板岩の産出地として著名であり、硯の原石の産出地としても知られている。

町域のほぼ中心を久慈川が南北に貫流し、久隆川・彦沢川・諸沢川・批把川などの支流が合流し、これらの河川の流域に沿って集落と耕地が開けている。特に町域の中央から南部は標高70~80mの台地状となり、主要な農耕地となっている。

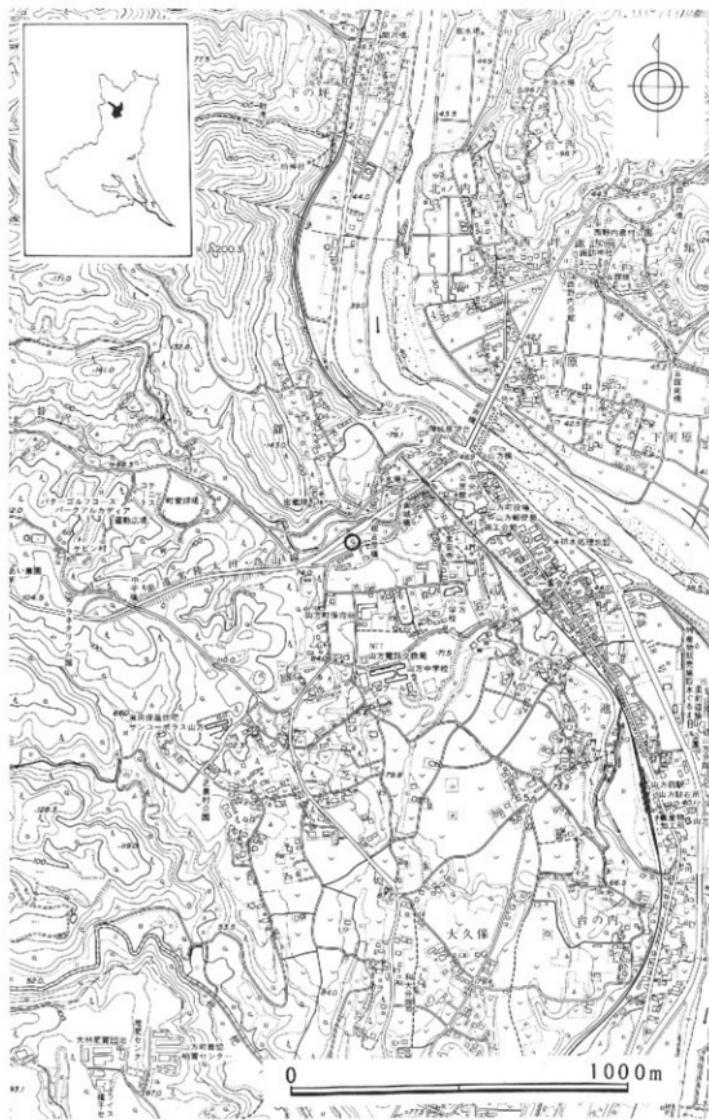
久慈川沿いに国道118号とJR水郡線が並走し、野上原・山方宿・中舟生・下小川の各駅周辺に集落が発達しており、山方宿駅周辺は町内唯一の商店街を形成している。

古墳の所在する山方地区は、町の中・南部で、緩やかに蛇行しながら南流する久慈川の河岸段丘上に位置し、主として農・商業地域で町の中心街を形成している。

町役場・県山方治山事務所・山方郵便局・中央公民館・山方小学校・山方中学校などがある。

久慈川の渓谷一帯は、かつて大町桂月が「山方より上流20kmは関東の耶馬溪」と激賞した奥久慈自然公園の一角をなし、清流公園やキャンプ場があって観光・レジャーの拠点となっている。

山方町の自然環境は以上のように概観できるだろう。



○ 江下山古墳

第一図 古墳位置図・周辺地形図

第三章 歴史的環境

『茨城県埋蔵文化財包蔵地地名表』(昭和62年・茨城県教育委員会)には、山方町の周知の遺跡として17か所が登載されている。今回新発見の「江下山古墳」も届出済であるから18か所になる。

久慈川右岸の山方遺跡は先土器時代から縄文晩期にわたる複合遺跡であり、前期の元倉遺跡、中・後期の小瀬遺跡などが台地から山間地に移行する地点に点在している。

古墳時代になると町役場西方の南皆沢に円墳13基・方墳4基からなる古墳群が築造されている。

久慈川を挟んで対岸の西野内遺跡からは土師器の出土もみられ、町域南部の野上西の坪には円墳11基からなる十三塚古墳群がある。

『常陸國風土記』に「北に小水有り、丹き石交雜れり。色は瑠璃に似て火を鑽るに尤好し。故れ玉川と号く」と記されている玉川は、当町塙田を水源とし清冽な流れの中でメノウを産してきた。

律令制下の当町域は常陸国久慈郡に属し『和名抄』にみえる岡田郷・八部郷・河内郷・余戸郷に比定されている。

本章では、町内の主要遺跡を概観してみよう。

山方遺跡 通し番号 3749 町番号 11 山方町山方

山方小学校の裏にある先土器時代の遺跡。久慈川右岸の標高73.8mの中位段丘面上に立地する。

昭和49年に表面採集された石核石器が、地質調査の結果鹿沼軽石層上の褐色ローム層中のものと認定され、昭和50年8月25日～9月2日に県史編纂事業の一環として調査が行われた。

褐色ローム層中よりホルンフェルス製の片刃の礫器1点、花崗岩製の円礫1点、硅質頁岩製・メノウ製の剝片21点の計23点が出土した。

剝片のうち硅質頁岩の剝片14点は表面採集された石核石器に接合し、また4点が同一母岩のものと確認された。

擾乱層・地表からは、該当期のものとして剝片6点と石核の断片1点が採集されている。

以上のほか、縄文前期(浮島I式・諸磕b式)、同後期・晩期の土器片、石鎌などが若干採集されている。

当遺跡は、県内の先土器遺跡中で最古のものというだけでなく、石器群の内容および剝片剝離技法の特徴などが、權現山II期と岩宿I期をつなぐ過渡的な様相を示している点でも重要な遺跡とされている。

十三塚古墳群 通し番号 638 町番号 3 山方町大字野上字西の坪～元倉

昭和62年茨城県教育委員会発行の『茨城県埋蔵文化財包蔵地地名表』によると、種別「古墳群」名称「十三塚古墳群」となっているが、実際の規模は直径3～9m、高さ1～2mぐらいで、おそらくは信仰塚群ではないかと思われる。

この塚群は野上の西の坪から元倉にかけた平坦な台地上に、長田・長沢・鷺子方面へ通ずる旧鳥山街道と呼ばれる道筋に、北から南へ一列に11の塚が並んでいる。2基は削平されて現存しない。

『重要埋蔵文化財包蔵地調査カード』(調査年月不詳)の記録によると、「中世の農民たちが佛に現世の利益を祈願するため、十三佛の信仰に由来して築造したものらしい。時代は平安」となっているが、十三佛信仰は現世の利益というよりは、初七日から三十三回忌まで十三回の追善供養の佛事のために配当された佛たちである。

初七日不動明王・二七日釈迦如来・三七日文殊菩薩・四七日普賢菩薩・五七日地藏菩薩・六七日弥勒菩薩・七七日藥師如来・百ヵ日觀世音菩薩・一周忌勢至菩薩・三回忌阿弥陀如来・七回忌阿閻如来・十三回忌大日如来・三十三回忌虚空藏菩薩の十三佛である。

これは室町時代に成立した民間信仰である。

したがって、『県地名表』や『遺跡台帳』の種別「古墳群」は「塚群」に、名称「十三塚古墳群」は「十三塚」に、時代「古墳時代」は「室町時代」に改める必要があろう。

南皆沢古墳群 通し番号 639 町番号 4 山方町大字南皆沢5776ほか

『重要埋蔵文化財包蔵地調査カード』には次のような記録がある。

「この古墳群とよばれる一帯は、山方町役場から西へ約2km、山方町長沢へ抜ける県道沿いの南皆沢山林の中にある。

標高約120m、南皆沢・北皆沢の谷津沢にはさまれた山林の一部にあたり、この山林の中に円墳2基、方墳1基が確認できる。

台帳では円墳13基、方墳4基となっているが、現在ではこれらすべてを確認できない。

このうち方墳1基は古い墓になって墓石が建てられているが、現在は使用されていない。

いずれにしてもすぐ破壊される心配はないと思われるが、標柱などの設置をして保存体制を図らなければ、いずれ削り取られる心配はある」

山方町教育委員会は、台帳に記載されている17基の所在確認のため、平成5年10月28日、茨城県水戸教育事務所の藤枝・千種両名と共に基数確認調査を行い、方墳1基、円墳8基計9基が現存することを確認した。

同時に位置図を作成し、略式測量も実施して台帳の整備を依頼した。

しかし、残りの8基については、近年開通した主要地方道常陸太田一鳥山線の建設開削の際に破壊され、湮滅した可能性が高いように思われる。

確認した古墳の規模は次のとおりである。(番号・種別・東西径・南北径・高さ)

1・方墳・8.5・9.5・1.7, 2・円墳・4.0・4.0・1.0, 3・円墳・6.7・7.0・1.2

4・円墳・4.0・4.0・2.0, 5・円墳・3.0・3.0・0.5, 6・円墳・4.8・4.8・0.9

7・円墳・5.4・5.4・1.1, 8・円墳・6.0・6.0・1.3, 9・円墳・3.0・3.0・0.5

第四章 調査の経過

2月14日 (火) あめ～くもり

- ・ 現場事務所前に関係者全員集合。吉沢教育長挨拶。調査団紹介。
- ・ 団長による古墳修祓式厳修。
- ・ 事務所にて調査方法説明。器材点検。調査エリアの確認。
- ・ 現状写真撮影（南・北両方向より）
- ・ 前方部より作業開始。樹木伐採。籠・雑草刈取り。清掃。

2月15日 (水) はれ

- ・ 前日に続き樹木伐採・清掃・焼却作業。
- ・ 前方部には上の道路から投棄されたと思われる空缶・空瓶・ガラス破片・ビニール・ポロ布などが散乱し、これの回収撤去作業に予想外の時間を費やす。
- ・ 来跡者 茨城県水戸教育事務所文化財担当社会教育主事 藤枝 登氏

2月16日 (木) くもり

- ・ 清掃、焼却、籠などの根株刈取り。
- ・ 前方部東側より葺石確認作業開始。墳丘上に堆積した腐食土の下5～10cm～葺石出現。
- ・ 来跡者 茨城県水戸教育事務所 社会教育指導員 清水 稔氏

2月17日 (金) はれ～くもり

- ・ 作業員全員葺石確認作業。葺石に使用されている礫は、基石を含めて円礫である。
- 本日までの作業では角礫は認められない。

2月18日 (土) はれ

- ・ 葺石確認作業継続。墳丘西側部ほぼ終了。
- ・ 作業風景写真撮影。
- ・ 地元および町内的一般見学者急増。

2月20日 (月) はれ

- ・ 葺石確認作業継続。墳丘東側斜面へ移る。今週一杯確認作業継続の予定。

2月21日 (火) はれ 風強し

- ・ 葺石確認作業継続。
- ・ 午後より後円部北側斜面に移る。北側墳丘は急斜面で、杉の裁植や山芋掘りによって、かなりの葺石が動かされている。

2月22日 (水) はれ

- ・ 葺石確認作業継続。

- ・ 見学者 山方小学校児童。
- 2月23日 (木) はれ 風強し
- ・ 菅石確認作業継続。
 - ・ 見学者 長田小学校児童。
- 2月24日 (金) はれ
- ・ 菅石確認作業継続。
 - ・ 後円部北側斜面の裾部から中段部にかけて、幅員2mの町道によって破壊を受けており、町道の路面下に菅石が埋没していることを確認する。
- 2月25日 (土) くもり～はれ
- ・ 菅石確認作業継続。本日終了。
 - ・ 後円部北側斜面の町道北側の裾部の疊群は、上から崩落したものや投棄されたものもあるが、比較的大型の石が急斜面保護のために葺かれていた事実を確認する。
- 2月28日 (火) はれ
- ・ 菅石水洗い作業。
 - ・ 菅石状態写真撮影。（正面・前方部東西両方向・後円部東西両方向・北側）
 - ・ 明日より開始する墳丘及び菅石実測作業の準備として、14分割線を設定。
 - ・ 主軸方向はほぼ南北を指す。
 - ・ 前期作業終了。明日より実測作業開始。（調査員3名、作業員2名とする）
- 3月2日 (木) はれ 北風強し
- ・ 前方部東側より墳丘測量開始（センター20cm、縮尺60分の1）
 - ・ 来跡者 吉澤 利教員長、山方町社会教育委員一行、小貫小学校平松孝志教諭。
- 3月3日 (金) はれ～くもり
- ・ 前方部西側墳丘測量作業。
 - ・ 調査関係者全員集合し記念写真撮影。
 - ・ 調査関係者全員集合し昼食会、前期作業の労を犒う。
- 3月6日 (月) はれ
- ・ 前方部墳丘測量終了。（午前）
 - ・ 後円部墳丘測量開始。（午後）
 - ・ 測量作業風景写真撮影。
- 3月7日 (火) はれ 風強し
- ・ 後円部墳丘測量継続。（西側）
 - ・ 北西風強く作業難行。

3月8日 (水) はれ

- ・ 後円部東側墳丘測量継続。
- ・ 見学者 小貫小学校児童。

3月9日 (木) はれ

- ・ 後円部北側墳丘測量。墳丘測量作業午前にて完了。
- ・ 午後より葺石実測図作成上の留意点について打合せ。

3月10日 (金) はれ

- ・ 葺石実測開始。前方部より縮尺10分の1。
- ・ 調査員3名。作業員2名にて分割担当して作図し、最後に全図を接合しさらに縮小することとする。

3月13日 (月) はれ

- ・ 葺石実測作業継続。
- ・ 来跡者 根本 嘉朗町長、山方町議会議員一行。

3月14日 (火) はれ

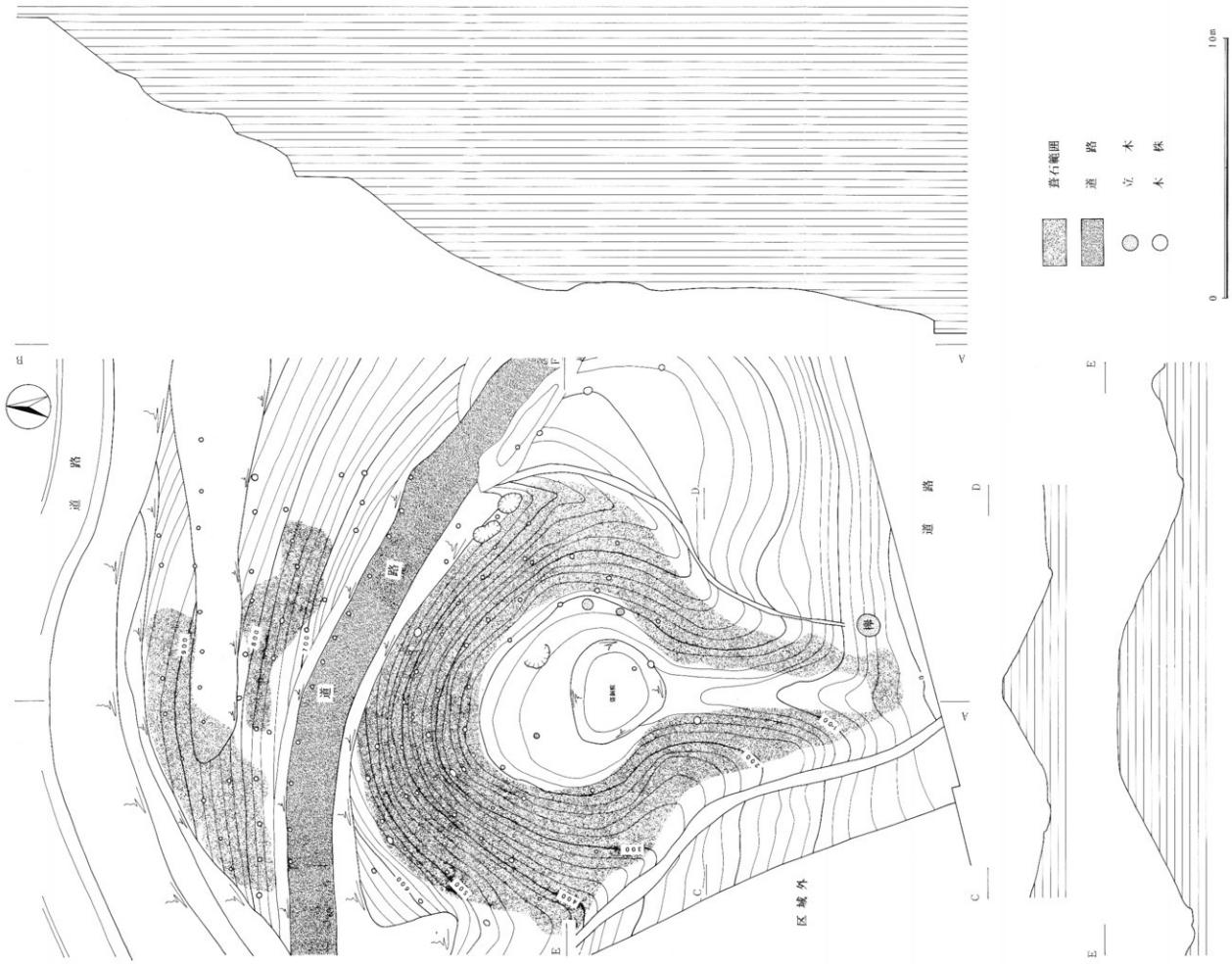
- ・ 葺石実測作業継続。後円部へ移る。
- ・ 予期以上に順調に作業進捗。

3月15日 (水) はれ～くもり

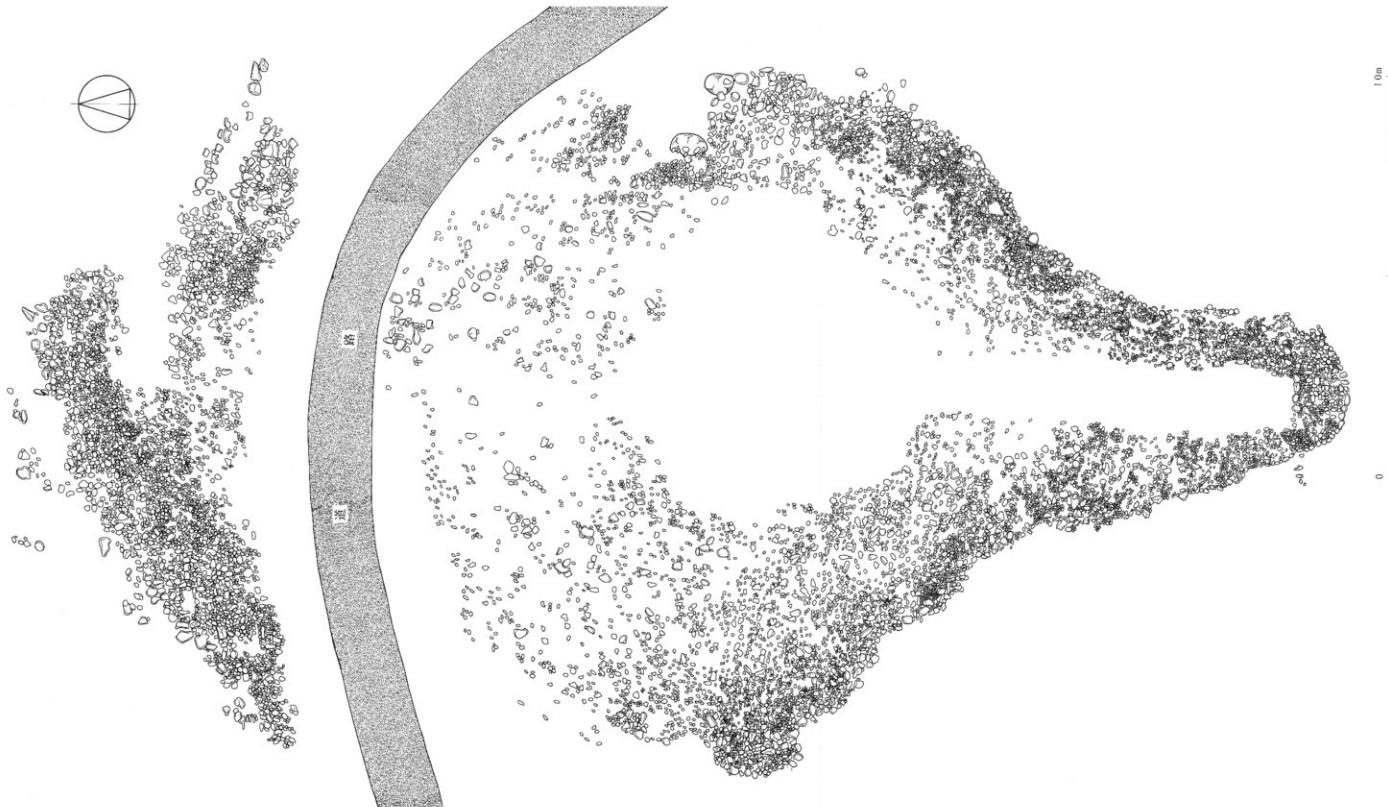
- ・ 葺石実測作業継続。後円部北側裾部へ移る。

3月16日 (木) くもり～はれ

- ・ 午後2時、葺石実測作業すべて完了。実測原図を仮接合し、未作図部分のないことを確認する。
- ・ 午後4時、現場事務所整理完了。23日間の確認調査は本日をもって一切終了した。



第二图 山方江下山古墳丘実測図



第三图 山方江下山古墓群石器图

第五章 前方後円墳の変遷

日本の古墳には、その墳丘の平面形で分類すると、前方後円墳、その変異形態ともいべき帆立貝式古墳や双方中円墳、さらに前方後方墳、円墳、方墳、八角墳、上円下方墳などさまざまな形式が認められる。

これらのうち最も数が多いのは円墳で、前方後円墳は円墳にくらべるとその数はきわめて少なくなる。

しかし、日本の古墳をその墳丘規模の順でみると第1位から45位くらいまではすべて前方後円墳ということになり、わが国の古墳の中では最も重要と考えられた墳形であることは確実である。

また終末期を除くと、古墳時代の前期から後期までのすべての時期に、また地域的にも北は岩手県胆沢郡胆沢町角塚古墳から、南は鹿児島県肝属郡高山町塚崎古墳群まで各地に営まれており日本を代表する墳形であることができる。

この「前方後円」という名称は、蒲生君平がその著『山陵志』で、垂仁天皇以降敏達天皇にいたる23陵について「その制をなすや、かならず宮車を象り、前方後円となしめ、壇をなすに三成とし、かつ環ラスに溝をもってす」としている。

後に明治以降の考古学者がこれを採用して「前方後円墳」という名称が定着した。

立体的な構築物としての前方後円墳の墳丘の形態が時代とともにどのように変化していったかを、近畿地方の大型前方後円墳を例に考えてみよう。

近畿地方の大古墳を例に取るのは、その規模が大きいために部分的には形がそこなわれていても全体の形状がつかみやすいことや、その大部分が皇室の陵墓となっていて、正確な測量図がそろっているからである。

箸墓タイプ

近畿地方の大型前方後円墳のなかで、最もさかのぼる段階のものと考えられているのは、奈良県桜井市の箸墓古墳である。

この古墳は墳丘長が276mの大前方後円墳で、四段築成の後円丘に、前面のみに段をもち、その前半部が大きくひろがる前方部がとりつき、さらにその後円部上に実際の埋葬が行われていると思われる円墳がのる。

この後円部上の円墳は、後円丘の第5段目でもあるが、その斜面の傾斜や周りのテラスの広さも4段目以下とは異なるので、性格を異にするものと思われる。

一方幅広い前方部の上面は、その先端部に平坦面があり、そこからゆるやかなスロープをなす鞍部をへて後円部の第四段上面のテラスに続いている。

前期初頭の前方後円墳と考えられている。

外山茶臼山タイプ

箸墓古墳よりやや新しい時に位置づけられる奈良県桜井市外山茶臼山古墳になると、前方部先端がほとんど開かなくなり、後円部と前方部の段が一連のものとなるが、前方後円形の墳丘の後円部上に円壇を営むという点では共通している。

前方部先端がほとんど開かないところから「手鏡型」と呼ばれる形態で、江下山古墳も小規模ながらまさにこのタイプである。

渋谷向山タイプ

前期の中頃になると、後円部上の円壇に変化がみられる。

奈良県天理市の渋谷向山古墳（現景行天皇陵）では、三段築成の前方後円墳の後円部上に巨大な円壇をのせているが、その円壇の一部を突出させて、円壇前面のスロープを前方部の上面に接続させている。

後円部の円壇上から前方部への通路が意識されていたことを示しているものと考えられる。

宝来山タイプ

渋谷向山タイプを経て前期の終り頃になると、前方部の最上段が後円部の最上段の円壇と一体化する。

奈良市宝来山古墳をその代表例とすることができるが、前方後円形の墳丘を三段に重ねた形態が完成する。

ただし、このタイプではまだ前方部最上段は後円部最上段の円丘の下半部に連接しているにすぎない。

墳丘全面の発掘調査が行われ、その本来の形態が明らかにされた兵庫県神戸市の五色塚古墳はこのタイプである。

仲ツ山タイプ

中期になると宝来山タイプから一步進んで、前方部の最上部の上面は後円部最上段のほとんど頂部近くまで達するようになる。

大阪府藤井寺市仲ツ山古墳をその初期の例としてあげることができるが、大仙陵古墳（現仁德天皇陵）、誓田御廟山古墳（現応神天皇陵）など中期の大前方後円墳の多くも、基本的にはこのタイプに含まれる。

土師ニサンザイタイプ

後円部最上段の円丘と前方部が完全に一体化し、前方部の上面が後円部頂に達するようになったのがこのタイプである。

大阪府堺市土師ニサンザイ古墳や、同藤井寺市市ノ山古墳など中期後半の古墳が含まれる。

このタイプには、前方部の方が後円部より高いものがあり、前方部前面が著しくひろがったも

のがみられる。

後期になると、土師ニサンザイタイプと基本的には変わりはないが、後円部と前方部の一体化がさらに進むようになる。

平面的にもくびれ部の幅が増してその輪郭が鐘形のようになり、立体的にも鞍部が高くなつて後円部頂や前方部頂との差が顕著ではなくなるようになる。

これは、前方後円墳の終末形態に位置づけられるものとされている。

このように、前方後円墳を立体的な構築物として、特に後円部と前方部の関係を中心にみてみると、同じ前方後円墳といつても前期の中頃までと、それ以降ではその形態に大きな相違がある。

すなはち、後円部と前方部が一体化し、前方後円形の墳丘を三段に重ねた形態が定着するのは宝来山タイプ以降のことであつて、それ以前は後円丘と前方部とは別個のものであった。

後円部は埋葬の行われる円（方）壇をのせる基壇であり、前方部はおそらく葬送祭祀を行う場であるとともに、後円丘への通路でもあったと考えられる。

ところが宝来山タイプ以降になると後円部と前方部が一体化し、前方部への埋葬例も多くなつてくる。

またこの頃から、くびれ部の両側あるいは片側に造り出しとよばれる突出部が出現するのも、おそらくこうした前方部の性格の変化とも関係するものと思われる。

造り出しが、一般に土器の出土などから祭祀の場と考えられており、本来祭祀の場としての機能をもっていた前方部が後円部と一体化するのにともなつて、祭祀の場がこの造り出しに移動したものと解釈することができる。

このような前方後円墳の形態の時代的な変化は、こうした近畿地方の巨大古墳だけではなく、基本的には全国各地の小規模な前方後円墳についても共通するものと思われる。

ただ小規模な古墳は段の築成なども省略されるのが普通で、後世の変形をうけ原形がそこなわることもあり、その形態上の特徴をとらえるのが困難な場合もある。

第六章 莖石考察

日本の古墳の墳丘は、多くの場合その斜面に葺石が施されている。

この葺石の役割りは、墳丘の斜面に限られ、墳丘上の広い平坦部や各段のテラス上には全くみられないところからも、墳丘の斜面を保護して古墳の崩壊を防ぐためのものとみるべきであろう。

墳丘の全面発掘調査の実施された兵庫県神戸市五色塚古墳では、前方後円形の三段からなる墳丘の斜面全面に葺石が施されていた。

用いられている石材は、上・中段に使用されているのが径15~30cm程度の円礫であるのに対し下段はやや小さく5~10cm程度の円礫である。

この葺石を葺くに際しては、まず盛土あるいは地山を整形した墳丘斜面に、小砂利混りの土を置き、その上に石を葺いている。

これは、葺石を固定させると共に、雨水を処理するための配慮であろうと考えられている。

葺石は、斜面の下縁にまず基石とよばれる比較的大きな石を並べ、その上に順次葺かれている。

また、基石列に直交するタテ方向にもあらかじめ石列による画線をつくり、作業の目安になっている。こうした画線石列は、他の多くの古墳の葺石の調査でも知られている。

古墳の葺石は古墳の近くで得られる石材を用いるのが普通だったようであるが、河原石を採集できるところでは円礫を、それを得られないところでは角礫が用いられることが多かったようである。

江下山古墳の葺石は円礫であるところから推考すると、近くを流れる久慈川の河原石を採集したものであろうと想定される。

江下山古墳の葺石の状態を観察すると、古墳とは知らずにスギやヒノキを栽植したために、その作業でかなりの葺石が動かされたり投棄されたりしており、さらに山芋掘りの穴が点在して葺石の空白部分も目立つ。

前方部の斜面は盛土の崩落もなく比較的原形に近いと思われる状態で葺石が残存するが、後円部斜面は脆弱が顕著で葺石の残存も少ない。特に北側斜面はこの傾向が一層顕著である。

また、後円部の北西裾部から東側斜面中段をテラス状に削って南東方向に通ずる幅1.5mほどの農道が通じており、この農道開削の際に障礙となって投棄されたと思われる礫や、後円部北側斜面の裁植の際に投棄された礫が北側の裾部から多量に確認された。

葺石工法の基石や画線石列に用いたものと思われる大形の円礫も存在するが、前述した理由で原形は破壊され移動している。

江下山古墳保存整備事業の計画策定の際には葺石の復原も課題にしなければならないだろう。

第七章 エピローグ

江下山古墳は、平成5年10月28日の発見の時点で、墳丘斜面に葺石のあることや、前方部がほとんど開かない茶臼山タイプ（手鏡型）の古墳であることを確認していたので、学術的に貴重な発見となる可能性が想定された。

山方町教育委員会と水戸教育事務所の両者で現状保存の方法について協議を重ねた結果、葺石が葺かれた築造当時の姿を確認するとともに、墳丘全体の実測図を作成するということで合意に達した。しかし、内部構造については一切手をふれないことにした。

後円部の中央より北側にはスギが栽植されていたため、実測に障害となるスギやヤブを伐採し墳丘周辺も伐開して古墳の全容を明らかにした。

墳丘の表面を蔽う厚さ10cmほどの腐食土の下からつぎつぎに葺石があらわれ、第三図に示したように墳頂部をのぞく斜面全面から葺石が確認された。

後円部北側斜面については、スギの栽植の際にかなりの葺石が動かされて、墳丘下への崩落も認められた。

続いて縮尺60分の1・センター20cmの実測図作成。典型的な手鏡型前方後円墳であることが実証された。（第二図）

時を移さず墳丘全体に1m方眼のメッシュを設定し、葺石実測図作成開始。5名で6日間を要し、前述第三図の実測図完成。

江下山古墳が発見されるまでは、久慈川流域における最北限の前方後円墳は、那珂郡大宮町に所在する糠塚古墳であるという認識であったが、今回の江下山古墳の発見によって古墳時代の『茨城県史料』に新たな1ページを加えることになるだろう。

江下山古墳の築造時期は、先頃わが国でもっとも古い古墳として話題になった奈良県桜井市の箸墓古墳よりやや新しい時期に位置づけされると思われるが、古墳時代の編年でいえば前期中葉～後葉頃の墳丘形式で、前方部先端が開かないのが特徴である。

いわゆる茶臼山タイプとか手鏡型といわれる所以であるが、畿内型の手鏡型が古墳時代前期のものであるとしても、実年代的にみれば本県に到達するまでには数十年を要したものと考えられるので、実際には4世紀末乃至5世紀初頭になるかもしれない。

江下山古墳の立地条件は自然の傾斜地（南高北低）を利用して築造されており、前方部先端から後円部際の道路までの標高差は12.5mを測る。

主軸方向はほぼ真北を示し、主軸長は28m、後円部の高さは3.5mほどでどちらかといえば小規模古墳である。

久慈川下流域に所在する県内第二の規模を有する梵天山古墳よりも古い時期に、この地に畿内

型の古墳が築かれたということは、被葬者は不明であっても、のちの久自国や大和朝廷との関連を研究するうえでは重要な価値を有するものと考えられる。

埴輪など出土遺物は皆無であったが、葺石を伴う前方後円墳として大洗町の鏡塚（日下塚）古墳や、ひたちなか市の磯崎東古墳群第一号墳（記録保存）があるが、手鏡型前方後円墳の葺石が現れた状態で現状保存される例は、茨城県内では江下山古墳が最初である。

予期以上の調査の成果に、町当局も大きな関心を示し、早速町指定史跡として保存と管理に万全を期そうと整備計画を検討している。

全国各地で前方後円墳の保存整備事業はさまざまな体制・目的をもって行われており、多大な成果を収めているが、江下山古墳も今後の保存整備が最大の課題となろう。

保存整備にあたって大切なことは、何の目的で、何を期待して保存整備を行うかということであろう。

現状保存という観点からすれば整備にはおのずから限界があり、整備調査個所ができるだけ限定し、必要最小限の発掘量で整備事業の内容に応え得るもののが要求されるだろう。

古墳のいたるところが切り刻まれるような発掘方法は避けなければならないし、それ故に、保存整備をどういうものにするのか、基本方針にもとづいて保存整備基本計画の策定が欠かせないものとなるだろう。

前方後円墳である江下山古墳は極めて意図的な性格をもってつくられた構築物である。

したがって、古墳が存在する周辺地域の景観を醸成していく、地域の自然・歴史環境の形成にも大きく関わっている。

それ故、保存整備事業は、単に手鏡型前方後円墳の整備ということにとどまることなく、地域の歴史景観の復元を基本に踏えて、情報媒体の整備という方向で計画するのが望ましいように思われる。

最後に東日本で葺石を伴う前方後円墳の整備事業の代表例として、長野県の森将軍塚古墳の保存整備事業を紹介してまとめとしたい。

森将軍塚古墳は、長野県更埴市千曲川右岸にある有明山から北東に延びる標高490mの尾根上に位置する。

全長約100mの前方後円墳で、後円部には二段墓壙をもつ長大な竪穴式石室が設けられ、長野県下唯一の舶載三角縁神獸鏡をはじめ玉類・鉄器などの副葬品の出土がある。

また墳丘には埴輪列が巡らされており、4世紀代の築造とされる。

古墳は、1981年から1992年の11年間にわたり、更埴市により「史跡森将軍塚古墳保存整備事業」が実施され、全面発掘調査及び保存整備工事が行われた。

現在、古墳築造当時の姿に復原整備され、広く一般に公開されている。

森将軍塚古墳は全面発掘調査が行われ、規模・形態が確認された。その結果に基づいて崩落して緩くなった埴丘盛土と共に、残存する葺石・襷石垣をいったん解体して、改めて積み直す復原工事が実施された。

多くの古墳の整備では、残存する葺石など遺構面を保護盛土で覆い、その上に復原的に葺石を設置して整備するのに対して、森将軍塚古墳では遺構そのものを本来の位置や形状に修理するという解体修理が行われている。

更埴市では、森将軍塚古墳の周辺環境整備事業として、古墳までの見学路の整備・周辺一帯の公園化整備事業を実施し、歴史追体験の場・カルチャーレクリエーションの場とすべく整備が図られている。

また、古墳時代の生活の様子がわかるように、当時の住居や水田などの復原整備が行われ、8棟が復原されて「科野のムラ」とネーミングされ公開している。

さらに更埴市では、平成9年度開館を目指して森将軍塚古墳の資料を公開する「森将軍塚古墳館（仮称）」の建設が現在行われている。

一方、古墳の整備工事は、材料や工法までも築造当时と同様の手法で行われたので、葺石の間から草が生え、その除草が大変な作業となっている。

また葺石は、葺石設置工事から十数年を経過し、冬期の凍み上がりを繰り返して緩みが生じてきただので、早晚補修工事が必要な状況になっている。

こうした維持管理は、将来にわたって実施されなければならないことで、整備計画策定に当っては維持管理計画も併せて検討すべきであろう。

こうした状況のもとで、市民の中からはボランティアにより整備後の古墳の草取りを行い、古墳に親しみながら歴史の学習を行う「森将軍塚古墳友の会」が結成され、年に3回の草取りを実施している。

また古墳の復原整備が完成した1992年から、古墳を多くの人に楽しみながら見てもらおうと、毎年11月3日に市民による「森将軍塚まつり」が開催され、「科野のムラ」の田んぼで収穫された米での餅つきや、古墳上での青空教室など多彩な催しが行われている。

参考文献

ニュー・サイエンス社『月刊考古学ジャーナル』 No.403 1996

確認調査に従事した人たち

千種重樹 主任調査員（団長）

水谷正調査員

飯島栄子調査員

作業員

坪井克 井坂信義 木村登美子 菊池さち子 菊池忠一
鈴木勉 鈴木三千男 木村豊 金子理一郎 神長政雄
井坂千代乃

事務局 山方町教育委員会社会教育係長 立原正雄

指導機関

茨城県教育庁文化課文化財2係

茨城県水戸教育事務所生涯学習課

謝辞

今回、新発見の江下山古墳の墳丘精密測量調査および葺石確認調査にあたっては、調査主体者の山方町教育委員会の方々から終始暖かいご高配とご協力をいただき、所期の目的を達成することができたことに対して、深甚なる感謝の誠を捧げるものである。

また、遙るものもない寒風が吹きつける嚴寒の季節に、真摯に意欲的に作業に従事して下さった作業員各位にもあらためて謝意を表する次第である。（調査員一同）

図 版





調査前の現状 <南より>



調査前の現状 <北より>



古墳の遠景 <北より>



後円部西側斜面の葺石確認作業風景 <南西より>



後円部北側墳丘下の砾群確認作業風景 <北より>



前方部の葺石状況 <南より>



後円部西側斜面の葺石状況 <南西より>



後円部東側斜面の葺石状況 <南東より>



後円部北側墳丘下の礫群（一）<東より>



後円部北側墳丘下の礫群（二）<南より>

図版 第六



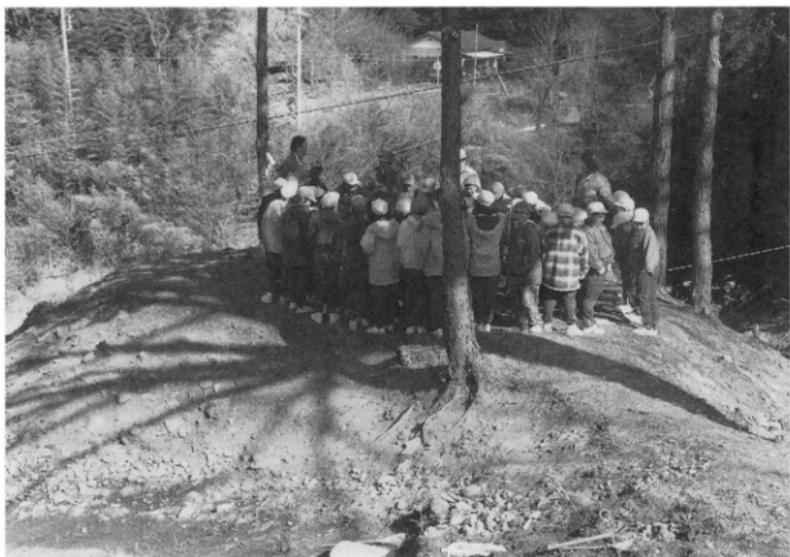
後円部北側墳丘下の礫群（三）<西より>



北方より後円部を望む <北より>



墳丘測量風景 <南より>



現地學習会（山方小学校）<南より>



現地学習会（長田小学校）<南より>



確認調査にかかわった人たち

江下山古墳

平成9年3月

執筆・編集 千 種 重 樹

発 行 山方町教育委員会

印 刷 (有)ミヅギ印刷社
水戸市河和田町4433-33
TEL 029-252-8481
